

大学生の居場所と心理的自立の関連について

博士前期課程 平成28年度修了生 松 島 なぎさ

要約

一般的に「居場所」を持つことは個人にとってポジティブな影響を与えるが、大学生が「家族のいる居場所」を重要な居場所であると感じることは必ずしもポジティブな心理的効果をもたらさないという知見がある。本研究ではその一因として発達に伴って大学生が「家族のいる居場所」から心理的に自立していくことを仮定し、大学生の居場所と心理的自立の関連について検討した。その結果、大学生が「家族のいる居場所」を最も重要な居場所として持っていて心理的自立の程度を低下させないことが示され、心理的自立を達成するにあたって重要なのは発達に応じた居場所を持つことよりも、複数の居場所において心理的自立に正の影響を及ぼす居場所の性質を感じることであると明らかになった。

キーワード：居場所、心理的自立、大学生

問題と目的

不登校問題の増加に伴い、1990年頃から「居場所」という言葉が注目されるようになった。1992年には文部省が「登校拒否（不登校）問題について一児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して」という報告書を発行しており、生徒が学校で心理的な「居場所」を持つことの重要性が唱えられている。現在は、特に不登校が問題視される小中高生の生徒に限らず、大学生を対象とした「居場所」研究も数多くみられるようになっている（岸・諸井，2011；白井，1998；堤，2002；吉川・粟村，2013）。これらの研究で用いられる「居場所」という言葉には「居る場所，いどころ（新明解国語辞典，1997）」という辞書的かつ物理的な意味だけでなく、心理的な意味が含まれているが、「居場所」の定義は研究によって異なっており、いまだ確立されたものはない。しかしながら、石本(2008)は先行研究を踏まえて、心理臨床における「居

場所」とは「ありのまま受け入れられることであると定義するものが多い」と述べている。このことから一般的に「居場所」を持つことは個人にとってポジティブな影響を与えると考えられており、「居場所」を持つことで得られる心理的効果についての実証的研究が数多くなされている（則定・齊藤，2007；佐藤・大津・佐野，2013；杉本，2010）。

ところで、個人の持つ主要な居場所は発達の变化していくことが明らかになっている。居場所が移り変わっていく過程については研究によって多少のばらつきが見られるが、児童期から青年期にかけて、主要な居場所が「家族のいる居場所（家庭）」から「友人のいる居場所」「自分ひとりの居場所」、さらには「恋人のいる居場所」等の居場所に移り変わっていくことがある程度共通して認められている（石本，2010；中村，1998；杉本・庄司，2006a，2006b，2006c；住田・溝田，2001）。このことから「家

居場所のいる居場所」が子どもの居場所の基盤として重要な役割を果たしていることがわかる。

しかしながら、大学生においては、「家族のいる居場所」を自分の居場所だと感じていることが、必ずしもポジティブな影響を与えるとはいえない場合がある。石本（2010）は、中学生においては家族関係で「ありのままにいられる」という居場所感を感じていることが自己肯定意識に対して促進的な影響を与えるが、大学生においては家族関係での居場所感は自己肯定意識にほとんど影響を与えていないことを明らかにしている。また、高橋・米川（2008）は「居場所」の要素として「安心」「支え」「所属」を抽出したが、アイデンティティの確立にあたって、大学生は高校生とは異なり、これらの要素を家族には求めていると述べている。さらに、杉本・庄司（2006b）は「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」「自分ひとりの居場所」をどのようなバランスでいくつ所有しているのかという「居場所環境」と精神的健康との関係を調べ、その結果からは、3種類すべての居場所を持つ大学生よりも、「友達のいる居場所」と「自分ひとりの居場所」の2種類だけの居場所を持つ大学生のほうが精神的な健康度が高いだけではなく、身体症状については「家族のいる居場所」がない大学生よりも、「家族のいる居場所」がある大学生の方が良くない傾向にあることが示されている。このような結果の一因としては、発達に伴って大学生が「家族のいる居場所」から心理的に自立していくこと、大学生になって「家族のいる居場所」以外の居場所が充実していないと、「家族のいる居場所」への依存を高めることが各研究で考察されている。しかしながら、大学生の持つ居場所と心理的自立との関連性について実証的に検証された研究は、筆者が調べ得た範囲では見当たらない。

本研究では、大学生の居場所と心理的自立の関連について実証的に検討し、大学生の居場所のあり方について考察することを目的とする。本研究では特に「家族のいる居場所」に焦点をあて、大学生が「家族のいる居場所」を重要な

居場所として持つことは発達に応じた居場所を持つことができているという観点から、心理的自立にマイナスの影響を与えると仮定する。

杉本・庄司（2007）は子どもの居場所研究に関する論文を概観する中で、「居場所」とは場所の持つ環境要因（個人に左右されずにあらかじめ決定している場所の特徴）に、個人がどのように感じるかという感情要因が組み合わせられることで構成されると述べている。本研究では、「家族のいる居場所」「友人のいる居場所」「恋人のいる居場所」「自分ひとりの居場所」という4つの環境要因に組み合わせられる感情要因として、これまでの研究で取り上げられてきた肯定的な性質のみならず、「他に居場所がない」といった消極的な性質を想定し、大学生の主要な居場所に含まれている両価性をもった感情要因について新たに考えていくこととする。したがって本研究では、「安心できる場所」「落ち着ける場所」といったはじめから居場所の性質を限定するような居場所の定義は避け、杉本・庄司（2006b）の「いつも生活している中で、特にいたいと感じ、いられる場所」を「居場所」の定義とする。しかしながら、調査対象である大学生は実家を離れて一人暮らしをしている者も少なくない。そのため「いつも生活している中で」と限定した場合、一人暮らしをしている大学生は「家族のいる居場所」が自分にとって重要だと感じていても、そこを居場所として選択しない可能性がある。本研究では調査対象者に合わせて「居場所」を「そこいたいと感じ、いられる場所」と定義し、大学生が「ここが自分の居場所である」と自己認識する最も重要な居場所について調査することとする。

方法

1. 調査対象

大学生および大学院生の男女525名（男性250名、女性275名）を対象に質問紙調査を行った。回答に不備のあった者を除き、最終的に507名（男性235名、女性272名）が有効回答者となった。平均年齢は19.99歳（SD=1.66）であった。

2. 調査時期

2016年10月～11月

3. 調査方法

無記名の自記式質問紙調査法。3つの大学で集団調査を実施した他、知人を通じて手渡し・郵送による個別調査も行った。回答時間はおよそ10分程度であった。

4. 調査内容

①フェイスシート

性別、年齢、回生、居住形態（自宅・下宿・寮・その他から選択）を尋ねた。

②居場所に関する質問

本研究における「居場所」の定義「そこいたいと感じ、いられる場所」を記載し、自分には「居場所」があると感じるか尋ねた。その中から居場所があると回答した者のみ、その居場所が「家族のいる居場所」「友人のいる居場所」「恋人のいる居場所」「自分ひとりの居場所」「その他（自由記述）」のどれにあてはまるかを尋ねた。なお、居場所を複数持っている場合は、「自分にとって最も重要だと思うものを1つだけ」選択してもらった。

③居場所の性質を調べる質問

②で居場所があると回答した者にのみ、選択した「居場所」にいるときのことを思い出しながら、「居場所」の心理機能測定尺度（杉本・庄司, 2006a）の回答を求めた。「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6因子全35項目の尺度である。さらに本研究では「居場所」のもつ消極的な性質を想定し、山岡（2002）の居場所条件尺度から「他に居場所がない」「ここが居場所だと言いつけさせている」などの項目を含む「すがりつき」因子の6項目を加え、計41項目の居場所性質尺度として、4件法で回答を求めた。

④心理的自立に関する質問

菱田・加藤・金子（2009）の自立性尺度を使用した。この尺度で自立は「他者との関係を保ちながら、自らの考え方や行動の仕方に関して、他者の考え方や行動を参照することはあっても、他者からの明確な独立性を確保し、自らの持つ内的基準に照らして吟味し、自ら選択・決定する傾向であり、自分の力で、自らの責任を自覚しながら、考え、判断し、行動することができることをいう。その際、自ら必要な支援を求めることを含む」と定義されており、「将来展望」「独自性」「自立の認識」「対人協調」「感情統制」「影響受けやすさ」の6因子27項目で構成されている。4件法で回答を求めた。

結果

1. 居場所性質尺度の因子分析

居場所性質尺度41項目について因子分析（最尤法、バリマックス回転）を行った。因子負荷量が.40以下の項目および複数の因子に.40以上の負荷がある項目を削除し、同様の因子分析を繰り返した結果、全31項目からなる6因子が抽出された。第1因子、第3因子、第5因子、第6因子は、先行研究にならひ、それぞれを「被受容感」、「精神的安定」、「自己肯定感」、「すがりつき」と命名した。第2因子は先行研究における「思考・内省」「行動の自由」因子の各項目と「精神的安定」因子の「誰にもじゃまされない」という項目から構成されており、個人が尊重され、自分自身のために過ごすことができる性質を表していると考えられることから「プライベート」と命名した。第4因子は先行研究における「他者からの自由」因子の各項目と「精神的安定」因子の「無理をしないでいられる」という項目、さらに「すがりつき」因子の各項目を逆転項目とした項目から構成されており、他者を気にせず、ありのままの自分でいられる性質を表していると考えられる。したがって、第4因子は「自然体」と命名した。Cronbachの α 係数を算出したところ、「被受容感」 $\alpha = .89$ 、「プライベート」 $\alpha = .81$ 、「精神的安定」

$\alpha = .84$, 「自然体」 $\alpha = .78$, 「自己肯定感」 $\alpha = .70$, 「すがりつき」 $\alpha = .59$ であり, 「被受容感」「プライベート」「精神的安定」「自然体」「自己肯定感」については一定の信頼性を確認できたが, 「すがりつき」の信頼性は低く, 内的整合性が十分にあるとはいえないことが明らかになった。居場所のネガティブな性質を考えるにあたって「すがりつき」は重要な要素であると想定されることから, 今後はより適切な項目を検討する必要があるだろう。

2. 自立性尺度の因子分析

自立性尺度27項目について因子分析(最尤法, バリマックス回転)を行った。因子負荷量が.40以下の項目および複数の因子に.40以上の負荷がある項目を削除し, 再び同様の因子分析を行った結果, 先行研究と同様の傾向を持つ6因子23項目が抽出された。したがって, 先行研究にならぬ, 第1因子を「将来展望」, 第2因子を「独自性」, 第3因子を「対人協調」, 第5因子を「感情統制」, 第6因子を「自立の認識」と命名した。なお, 第4因子の「影響受けやすさ」の項目については, 尺度の方向性を統一するために逆転項目として扱うこととする。したがって, 本研究では第4因子を「影響受けにくさ」と命名する。Cronbachの α 係数を算出したところ, 「将来展望」 $\alpha = .82$, 「独自性」 $\alpha = .71$, 「対人協調」 $\alpha = .76$, 「影響受けにくさ」 $\alpha = .77$, 「感情統制」 $\alpha = .71$, 「自立の認識」 $\alpha = .75$ であり, 一定の信頼性が確認された。

3. 男女別にみた各居場所の性質について

本研究では, 社会に出て行く前段階にある青年期の大学生を研究対象とするため, 以後の分析では年齢が25歳以上の回答者10名を除いた497名(男性227名, 女性270名)を分析対象とした。平均年齢は19.88歳($SD = 1.42$)であった。居場所があると回答した471名のうち, 「家族のいる居場所」を選んだのは198名, 「友人のいる居場所」を選んだのは140名, 「恋人のいる居場所」を選んだのは21名, 「自分ひとりの居場所」

を選んだのは99名, 「その他」を選んだのは13名であった。「恋人のいる居場所」と「その他」については, 選択した人数が少なかったため, 以後の分析から除外した。表1は居場所性質尺度の各因子の平均得点を居場所ごとに算出したものである。それぞれの居場所の性質を男女別に検討するために, 居場所性質尺度の各因子得点を従属変数, 各居場所と性別を独立変数とした2要因分散分析を行った。

「被受容感」については, 性別の主効果($F = 7.06$, $df = 1/427$, $p < .01$)と居場所の主効果($F = 216.76$, $df = 2/427$, $p < .001$)が有意であったが, 交互作用は有意ではなかった。多重比較を行ったところ, 男性より女性, 自分ひとりの居場所より家族, 友人のいる居場所を選んだ者の方が, 「被受容感」が高かった。「プライベート」については, 性別の主効果($F = 4.66$, $df = 1/426$, $p < .05$)と居場所の主効果($F = 59.36$, $df = 2/426$, $p < .001$)が有意であったが, 交互作用は有意ではなかった。多重比較を行ったところ, 「プライベート」は男性より女性の方が高く, 自分ひとりの居場所, 家族のいる居場所, 友人のいる居場所の順番で高かった。「精神的安定」については, 居場所の主効果($F = 6.23$, $df = 2/427$, $p < .01$)が有意であったが, 性別の主効果と交互作用は有意ではなかった。多重比較を行ったところ, 友人のいる居場所, 自分ひとりの居場所より家族のいる居場所を選んだ者の方が「精神的安定」が高かった。「自然体」については, 居場所の主効果($F = 31.70$, $df = 2/428$, $p < .001$)が有意であったが, 性別の主効果と交互作用は有意ではなかった。多重比較を行ったところ, 友人のいる居場所より家族のいる居場所, 自分ひとりの居場所を選んだ者の方が「自然体」が高かった。「自己肯定感」については, 性別の主効果($F = 4.06$, $df = 1/430$, $p < .05$)と居場所の主効果($F = 8.05$, $df = 2/430$, $p < .001$)が有意であったが, 交互作用は有意ではなかった。多重比較を行ったところ, 女性より男性, 自分ひとりの居場所より家族, 友人のいる居場所を選んだ者の方が, 「自己肯

表1 各居場所における居場所性質尺度因子の平均得点（標準偏差）

| | | 被受容感 | プライベート | 精神的安定 | 自然体 | 自己肯定感 | すがりつき |
|-----------|----|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 家族のいる居場所 | 男性 | 3.32(50) | 3.17(51) | 3.48(49) | 3.44(52) | 2.92(57) | 1.79(71) |
| | 女性 | 3.37(46) | 3.17(47) | 3.51(44) | 3.46(48) | 2.81(64) | 1.84(54) |
| 友人のいる居場所 | 男性 | 3.20(43) | 2.65(59) | 3.28(40) | 2.97(54) | 2.84(55) | 1.86(58) |
| | 女性 | 3.38(40) | 2.88(50) | 3.37(51) | 3.06(53) | 2.76(57) | 1.86(60) |
| 自分ひとりの居場所 | 男性 | 1.99(62) | 3.42(39) | 3.30(54) | 3.49(58) | 2.65(78) | 1.83(69) |
| | 女性 | 2.18(76) | 3.51(43) | 3.36(58) | 3.48(64) | 2.46(65) | 2.02(75) |

表2 各居場所における自立性尺度の平均得点（標準偏差）

| | | 自立性 | 将来展望 | 独自性 | 対人協調 | 影響受けにくさ | 感情統制 | 自立の認識 |
|-----------|----|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 家族のいる居場所 | 男性 | 2.87(30) | 2.64(68) | 3.23(42) | 3.17(46) | 2.37(73) | 2.83(45) | 2.71(76) |
| | 女性 | 2.79(36) | 2.56(69) | 3.12(46) | 3.09(48) | 2.35(71) | 2.68(52) | 2.68(64) |
| 友人のいる居場所 | 男性 | 2.82(33) | 2.58(74) | 3.22(44) | 3.10(47) | 2.23(65) | 2.78(55) | 2.76(62) |
| | 女性 | 2.77(28) | 2.49(55) | 3.09(37) | 3.22(43) | 2.21(67) | 2.64(51) | 2.71(58) |
| 自分ひとりの居場所 | 男性 | 2.77(39) | 2.53(70) | 3.14(49) | 2.83(42) | 2.40(68) | 2.77(52) | 2.69(65) |
| | 女性 | 2.74(38) | 2.48(54) | 3.09(50) | 2.92(55) | 2.42(60) | 2.59(58) | 2.71(69) |

定感」が高かった。「すがりつき」について分析を行ったところ、性別の主効果、居場所の主効果、交互作用は有意ではなかった。

4. 男女別にみた各居場所と心理的自立との関係について

表2は自立性尺度の平均得点および因子ごとの平均得点を居場所別に算出したものである。それぞれの居場所が心理的自立に与える影響を男女別に検討するために、自立性尺度の全体得点と各因子得点を従属変数、各居場所と性別を独立変数とした2要因分散分析を行った。

心理的自立尺度の全体得点、「将来展望」、「自立の認識」については、それぞれ性別の主効果、居場所の主効果、交互作用は有意ではなかった。「独自性」については、性別の主効果 ($F=4.90$, $df=1/429$, $p<.05$) が有意であり、女性より男性の方が高かったが、居場所の主効果と交互作用は有意ではなかった。「対人協調」については、居場所の主効果 ($F=11.94$, $df=2/429$, $p<.001$) が有意であったが、性別の主効果と交互作用は有意ではなかった。多重比較を行ったところ、自分ひとりの居場所より家族、友人のいる居場所を選んだ者の方が、「対人協調」

が高かった。「影響受けにくさ」については、居場所の主効果 ($F=2.63$, $df=2/431$, $p<.10$) が有意傾向であったが、性別の主効果、交互作用は有意ではなかった。また、多重比較を行ったが、その結果は有意ではなかった。「感情統制」については、性別の主効果 ($F=8.47$, $df=1/427$, $p<.01$) が有意であり、女性より男性の方が高かったが、居場所の主効果と交互作用は有意ではなかった。

5. 各居場所の性質が心理的自立に与える影響および男女差について

それぞれの居場所の性質が心理的自立に与える影響について男女別に検討するために、居場所性質尺度の6因子「被受容感」「プライベート」「精神的安定」「自然体」「自己肯定感」「すがりつき」を説明変数とし、自立性尺度の各因子を目的変数とした重回帰分析を、居場所別、男女別に行った。解析は一括投入法による。

家族のいる居場所を選択した男性を対象に分析を行ったところ、「精神的安定」と「被受容感」因子の間に高い相関がみられ、多重共線性が疑われた。そこで「精神的安定」を除いた5因子を説明変数として再度分析を行った結果、「被

受容感」が「将来展望」,「独自性」,「自立の認識」に,「プライベート」が「対人協調」に,「自己肯定感」が「独自性」,「対人協調」に有意な正の影響を与えている一方,「自然体」が「対人協調」,「自立の認識」に,「すがりつき」が「独自性」,「対人協調」に有意な負の影響を与えていることがわかった(表3)。友人のいる居場所を選択した男性を対象に分析を行った結果,「被受容感」が「将来展望」に,「プライベート」が「将来展望」,「対人協調」,「自立の認識」に正の影響を与えている一方,「精神的安定」が「影響受けにくさ」に,「すがりつき」が「感情統制」

に有意な負の影響を与えていることがわかった(表4)。自分ひとりの居場所を選択した男性を対象に分析を行った結果,「被受容感」が「対人協調」に,「自己肯定感」が「独自性」,「影響受けにくさ」,「感情統制」,「自立の認識」に正の影響を与えている一方,「プライベート」が「影響受けにくさ」に,「すがりつき」が「対人協調」に有意な負の影響を与えていることがわかった(表5)。

家族のいる居場所を選択した女性を対象に分析を行ったところ,「精神的安定」と「被受容感」因子の間に高い相関がみられ,多重共線性が疑

表3 自立性尺度の各因子に対する重回帰分析の結果(男性・家族のいる居場所)

| | 将来展望 | 独自性 | 対人協調 | 影響受けにくさ | 感情統制 | 自立の認識 |
|-----------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | β | β | β | β | β | β |
| 被受容感 | .328* | .400** | | | | .340* |
| プライベート | | | .274* | | | |
| 自然体 | | | -.301* | | | -.288* |
| 自己肯定感 | | .248* | .315* | | | |
| すがりつき | | -.235* | -.273* | | | |
| 重相関係数 (R^2) | .204* | .499*** | .322*** | .684 | .086 | .314*** |

注: * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表4 自立性尺度の各因子に対する重回帰分析の結果(男性・友人のいる居場所)

| | 将来展望 | 独自性 | 対人協調 | 影響受けにくさ | 感情統制 | 自立の認識 |
|-----------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | β | β | β | β | β | β |
| 被受容感 | .288* | | | | | |
| プライベート | .308* | | .301* | | | .475** |
| 精神的安定 | | | | -.289* | | |
| 自然体 | | | | | | |
| 自己肯定感 | | | | | | |
| すがりつき | | | | | -.304* | |
| 重相関係数 (R^2) | .236** | .151 | .378*** | .137 | .220** | .163 |

注: * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表5 自立性尺度の各因子に対する重回帰分析の結果(男性・自分ひとりの居場所)

| | 将来展望 | 独自性 | 対人協調 | 影響受けにくさ | 感情統制 | 自立の認識 |
|-----------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | β | β | β | β | β | β |
| 被受容感 | | | .470** | | | |
| プライベート | | | | -.385* | | |
| 精神的安定 | | | | | | |
| 自然体 | | | | | | |
| 自己肯定感 | | .496** | | .373* | .329* | .340* |
| すがりつき | | | -.319* | | | |
| 重相関係数 (R^2) | .101 | .434*** | .281* | .299* | .214 | .223 |

注: * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

われた。そこで「精神的安定」を除いた5因子を説明変数として再度分析を行った結果、「被受容感」が「対人協調」,「自立の認識」に,「プライベート」が「独自性」に,「自己肯定感」が自立性尺度のすべての因子に有意な正の影響を与えている一方,「自然体」が「独自性」に,「すがりつき」が「対人協調」,「感情統制」に有意な負の影響を与えていることがわかった(表6)。友人のいる居場所を選択した女性を対象に分析を行ったところ,「精神的安定」,「被受容感」,「自然体」因子の間に高い相関がみられ,多重共線性が疑われた。そこで「被受容感」と「自然体」を除いた4因子を説明変数として再度分析を行った結果,「精神的安定」が「対人協調」に,「自己肯定感」が「影響受けにくさ」

に有意な正の影響を与えている一方,「すがりつき」が「影響受けにくさ」,「感情統制」に有意な負の影響を与えていることがわかった(表7)。自分ひとりの居場所を選択した女性を対象に分析を行ったところ,「プライベート」,「精神的安定」,「自然体」因子の間に高い相関がみられ,多重共線性が疑われた。そこで「精神的安定」を除いた5因子を説明変数として再度分析を行った結果,「すがりつき」が「将来展望」,「影響受けにくさ」に有意な負の影響を,「自己肯定感」は「独自性」には有意な正の影響を,「影響受けにくさ」には有意な負の影響を与えていることがわかった(表8)。

表6 自立性尺度の各因子に対する重回帰分析の結果(女性・家族のいる居場所)

| | 将来展望 | 独自性 | 対人協調 | 影響受けにくさ | 感情統制 | 自立の認識 |
|-----------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | β | β | β | β | β | β |
| 被受容感 | | | .201* | | | .265* |
| プライベート | | .446*** | | | | |
| 自然体 | | -.183* | | | | |
| 自己肯定感 | .247* | .208* | .229* | .249* | .304** | .205* |
| すがりつき | | | -.192* | | -.173* | |
| 重相関係数 (R^2) | .162*** | .295*** | .289*** | .049 | .126** | .136** |

注: * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表7 自立性尺度の各因子に対する重回帰分析の結果(女性・友人のいる居場所)

| | 将来展望 | 独自性 | 対人協調 | 影響受けにくさ | 感情統制 | 自立の認識 |
|-----------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | β | β | β | β | β | β |
| プライベート | | | | | | |
| 精神的安定 | | | .407** | | | |
| 自己肯定感 | | | | .307* | | |
| すがりつき | | | | -.291* | -.448** | |
| 重相関係数 (R^2) | .028 | .033 | .272** | .197* | .230** | .076 |

注: * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表8 自立性尺度の各因子に対する重回帰分析の結果(女性・自分ひとりの居場所)

| | 将来展望 | 独自性 | 対人協調 | 影響受けにくさ | 感情統制 | 自立の認識 |
|-----------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | β | β | β | β | β | β |
| 被受容感 | | | | | | |
| プライベート | | | | | | |
| 自然体 | | | | | | |
| 自己肯定感 | | .375* | | -.334* | | |
| すがりつき | -.377* | | | -.345* | | |
| 重相関係数 (R^2) | .167 | .144 | .115 | .175 | .105 | .135 |

注: * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

考 察

「家族のいる居場所」「友人のいる居場所」「自分ひとりの居場所」の性質を男女別に比較したところ、大学生にとっての「友人のいる居場所」「自分ひとりの居場所」は、男女ともに、他者に受容され自分に自信の持てる感覚と他者から解放されリラックスできる感覚とがトレードオフの関係になる居場所であり、「家族のいる居場所」は、「友人のいる居場所」「自分ひとりの居場所」がそれぞれ特徴として持っている肯定的な性質を併せ持つ居場所であることが明らかになった。また、どの居場所も、男女ともに、「他に居場所がない」といった消極的な理由から選択されることはなかった。本研究から得られた各居場所の性質は、杉本・庄司 (2006a) が小学生から高校生を対象に行った先行研究で述べている各居場所の特徴とおおむね一致しており、大学生になっても個人が各居場所に対して普遍的な性質を感じていることが示唆された。

また、「家族のいる居場所」「友人のいる居場所」「自分ひとりの居場所」が心理的自立に与える影響を男女別に比較したところ、「自分ひとりの居場所」を選択した者よりも、「家族のいる居場所」や「友人のいる居場所」を選択した者の方が「対人協調」の得点が高かったが、自立性尺度の全体得点やそのほかの因子得点には居場所による有意差がみられなかった。本研究では、発達に伴って居場所が変遷していく中で、大学生になっても「家族のいる居場所」を最も重要な居場所として持ち続けていることは、家族への依存を高め、心理的自立心を低下させると考えていた。しかしながら、得られた結果からは、大学生が「家族のいる居場所」を重視していても心理的自立心は下がらないこと、むしろ「対人協調」の観点からはよい影響をもたらすことが明らかになった。大学生にとって、「家族のいる居場所」にすがりついているような状態は不健康であるかもしれないが、本結果からは、大学生が「家族のいる居場所」を他の居場所より重視しているだけではすがりつきとは言えず、心理的自立の妨げともならない可能

性が示唆された。

さらに、「家族のいる居場所」「友人のいる居場所」「自分ひとりの居場所」の各性質が心理的自立に与える影響を男女別に比較したところ、居場所の性質が心理的自立に与える影響のパターンには、居場所や性別によって違いがあることが明らかになった。また、すべての居場所で男女ともに「すがりつき」が心理的自立のいくつかの因子に負の影響を与えることがわかり、どの居場所においても大学生が『自分にとっての居場所はここしかない』と感じることは心理的自立を低下させることが示された。

「家族のいる居場所」においては男女ともに「被受容感」、「プライベート」、「自己肯定感」が心理的自立に正の影響を与えており、特に女性においては「家族のいる居場所」において「自己肯定感」を感じていることが心理的自立尺度のすべての因子に正の影響を与えていた。松並・荻野 (2015) は女性が親との関係を維持しながら自立を獲得していくと述べている。女性が「家族のいる居場所」において、家族との関係の中で自分自身を肯定的に捉えられることは心理的自立を獲得していくうえで重要であるといえるだろう。一方、男女ともに「家族のいる居場所」では、「すがりつき」だけでなく「自然体」を感じていることも心理的自立に負の影響を与えることが明らかになった。先に述べたように、男女ともに「家族のいる居場所」を持つこと自体は心理的自立心を低下させないが、本結果からは、「家族のいる居場所」における居心地のよさに甘んじているような状況は大学生の心理的自立心を妨げることが示唆される。大学生の心理的自立にとっては単なる「家族のいる居場所」の有無よりも、そこでの過ごし方が重要であるといえるだろう。

「友人のいる居場所」においては男女ともに「すがりつき」が「感情統制」に負の影響を与えており、「友人のいる居場所」しか居場所であると感ぜられていない大学生は感情的な不安定さをもっていることが示唆された。また、「友人のいる居場所」で「精神的安定」を感じてい

ることは、女子大学生にとっては心理的自立に正の影響を与える一方、男子大学生にとっては負の影響を与えており、心理的自立に良い影響を与える「友人のいる居場所」のあり方は男女で異なっていることが明らかになった。「自分ひとりの居場所」においても、男子大学生が「自己肯定感」を感じることは心理的自立のさまざまな側面に正の影響を与える反面、女子大学生が「自分ひとりの居場所」に「自己肯定感」を感じていると、「独自性」には正の影響を与えるものの、「影響受けにくさ」には負の影響を与えることがわかり、「家族のいる居場所」以外の居場所は性別によって異なるあり方を持つことがうかがえた。また、女性の「自分ひとりの居場所」における「自己肯定感」以外の居場所感は心理的自立心に正の影響を与えていなかった。男性は「家族のいる居場所」「友人のいる居場所」「自分ひとりの居場所」それぞれにおいて、心理的自立心の複数の側面に正の影響を与える居場所感があることが確認されたが、女性において心理的自立心の複数の側面に正の影響を与える居場所感とは「家族のいる居場所」における「被受容感」と「自己肯定感」だけであった。この結果は、女子大学生の心理的自立にとって、「家族のいる居場所」のあり方が重要であることをより強調しているといえるだろう。

以上のことから、居場所を持つだけでなく、その性質をどう捉えるかが、大学生における心理的自立の達成を左右することが示された。つまり、大学生が心理的自立を果たすには、発達に応じた居場所を持つこと以上に、複数の居場所を持ち、それぞれの居場所で心理的自立に正の影響を及ぼす性質を感じ取ることが重要であるといえるだろう。

まとめと今後の課題

大学生が「家族のいる居場所」を最も重要な居場所として持っている、そのほかの発達に応じた居場所を持つことができていない可能性が指摘されている。本研究ではこの観点から、

大学生の居場所と心理的自立をめぐって分析を行ったが、大学生が「家族のいる居場所」を最も重要な居場所として持っている、心理的自立の程度を低下させないことが示され、心理的自立を達成するにあたって重要なのは、発達に応じた居場所を持つことよりも、複数の居場所において心理的自立に正の影響を及ぼす居場所の性質を感じることであることが明らかになった。

本研究では大学生に居場所の有無を尋ね、選択肢から具体的な居場所を選んでもらう方法を採用したが、居場所が複数ある者にはその中から自分にとって最も重要だと思うものを1つだけ選んで記述してもらった。さらに、本研究では、選択した人数の少なさから、「居場所なし」と回答した者、居場所として「恋人のいる居場所」「その他」を選択した者については、量的な検討を実施できなかった。しかし、大学生の持つ居場所は複数あり、それぞれの居場所をどのようなバランスで所有するかが重要であると言われている。今後は、大学生がどのような居場所をいくつ持っており、そこでどのような性質を感じているかについても併せて調査することによって、それぞれの持つ居場所のあり方をより細かく検討していくことが望まれる。また、それぞれの居場所の性質が心理的自立に与える影響について男女別に検討するために行った重回帰分析では、いくつかのモデルにおいて重決定係数が低く、多重共線性が確認されたことから、本研究で想定した説明変数で目的変数を十分に説明できるとはいえなかった。今後は、大学生の心理的自立に影響を与える居場所の性質をより深く検討し、再度分析を行う必要があるだろう。

本研究では、社会に出て行く前段階にある青年期の大学生が持つ居場所に焦点を絞って検討を行ったが、大学を卒業し、社会に出ていくと、それに伴って居場所のありようも変化していくと考えられる。今後は、社会人の持つ居場所との比較や青年期から成人期にかけての居場所に関する縦断的研究を行い、「居場所」の持つ性

質やその位置づけについて、生涯発達の的に検討することが望まれる。

引用文献

菱田陽子・加藤礼子・金子勲榮 (2009). 現代青年の自立性に関する研究—自立性尺度作成の試み— 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 2, 157-168.

石本雄真 (2008). 居場所感に関連する大学生の生活の一側面 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(1), 1-6.

石本雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21(3), 278-286.

岸可奈子・諸井克英 (2011). 女子大学生における居場所感覚—大学と家庭という心理的空間— 同志社女子大学生生活科学, 45, 20-28.

松並知子・萩野佳代子 (2015). 女子大学生のキャリアプランと「自立」の関連—心理・社会的・経済的側面を含めて— 神戸女学院大学論集, 62(2), 123-136.

中村泰子 (1998). 居場所イメージの発達の变化—〇△□法の基礎的研究として— 児童・家族相談所紀要, 15, 45-56.

則定百合子・齊藤誠一 (2007). 青年期の心理的居場所感がレジリエンスに及ぼす影響 日本青年心理学会大会発表論文集, 15, 80-81.

佐藤香奈・大津悦夫・佐野秀樹 (2013). 大学生の過去の「居場所」と心理社会的発達の関連—「居場所環境」および「居場所」の心理的機能に着目して— 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 64(1), 205-212.

白井利明 (1998). 学生は居場所をどうとらえているか—自己受容とセルフ・エスティームとの関連— 日本青年心理学会大会発表論文集, 6, 34-35.

杉本希映 (2010). 中学生の「居場所環境」と精神的健康との関連の検討 湘北紀要, 31, 49-62.

杉本希映・庄司一子 (2006a). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究, 54, 289-299.

杉本希映・庄司一子 (2006b). 大学生の「居場所環

境」と精神的健康との関連—過去の「居場所環境」の認知との比較を中心に— 共生教育学研究, 1, 37-47.

杉本希映・庄司一子 (2006c). 大学生の「居場所環境」と自我同一性との関連—現在と過去の「居場所環境」に対する認知との比較を中心として— 筑波教育学研究, 4, 83-101.

杉本希映・庄司一子 (2007). 子どもの「居場所」研究の動向と課題 カウンセリング研究, 40(1), 81-91.

住田正樹・溝田めぐみ (2001). 子どもの居場所とネットワーク 日本教育学会大会研究発表要項, 60, 54-55.

高橋昌子・米川勉 (2008). 青年期における「居場所」の研究 福岡女学院大学大学院紀要: 臨床心理学, 5, 57-66.

田中智雄 (1992). 登校拒否 (不登校) 問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して— (学校不適応対策調査研究協力者会議報告) 教育委員会月報, 44(2), 25-29.

堤雅雄 (2002). 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 鳥根大学教育学部紀要 (人文・社会科学), 36, 1-7.

山岡俊英 (2002). 大学生の居場所とセルフエスティームに関する一研究 佛教大学教育学部学会紀要, 1, 137-167.

山田忠雄編 (1997). 新明解国語辞典第五版 三省堂
吉川満典・粟村昭子 (2013). 大学生におけるアイデンティティの確立について—心理的居場所との関係性から— 総合福祉科学研究, 4, 35-41.